

DSな先輩に雑魚乳首がバレました

（今日もねちねち♡乳首イキさせられて

独占欲丸出しでどちゅどちゅ♡突かれちゃってます）

飲み会は、嫌いじゃない。

会社の方針で出費はほとんどないし、盛り上げ上手な先輩が多いし、そもそもお酒って美味しいし。

だから結局、私にとって一番重要なのって『隣に誰が座るか』だった
りする。

「瀬川ちゃん、次これ飲もうよ」

今日のお隣は、会社で一番のモテ男・水上さんだった。

ただしモテると好感が高いというのは別物で、彼は俗に言う女たらし、
あるいはヤリチンなのである。

入社当初から諸先輩方に「水上の隣に座らない方がいい」と口酸っぱ
く言われていたが、今日は新入社員ちゃんを庇う形で隣に座ることになっ
た。

そのまま、飲み会開始からずっとお隣をキープされている。

(めっちゃ飲ませてくる……!!)

しかし、私がここで「いやーもうそろそろ」なんて言ってしまうと、
予先は酒豪で話題の新入社員ちゃんに行ってしまうだろう。水上さんに
食べられてしまった子が早期退職してしまう流れは、正直もう見たくない
し勘弁もしてほしかった。

「いいですね、いきましよう!」

変な根性を見せた私は、声高らかに本日五杯目のアルコールをオーダー
したのだった。

(こうなりやヤケだ!)

こういう変な根性で、後悔することがたまにある。



「じゃ、そろそろここお開きにしようかー」

幹事の先輩の声がある。

（ああ、やつと……!!）

「あー私、ちょろろつと、お手洗に行ってきますねー」

「大丈夫？ 瀬川ちゃん。ちょっとふらついてない？」

「全然！ 真っ直ぐです！」

堂々と嘘をついて、ふらふらとトイレに向かった。

（水上さん、全然酔ってないの何なんだ……化け物……？）

身体は言うことを聞いてくれないが、頭は割と冷静だった。トイレで頭を抱えながら用を足し、蛇口から出る冷水で手を冷やす。

（よし。よし。このまま毅然と、家に帰る！ あとのことは先輩たちが

なんとかしてくれるはず！)

当然のように二次会がある社風の弊社は、当然のように女癖の悪い社員への対応も決まっている。だから、私の役割はここまでだと自信をもつて言えた。

(なかなか良いディフェンスだったのではないでしょうか。今後の活躍に期待ですね)

などと、一人でふざけた反省会をしながらトイレを出ると、大きな人影がぬつとやってきた。思わず肩が跳ね上がる。

「わっ」

黒髪、垂れた目、気が強そうな眉。

「た、高嶺さん」

同じ部署の先輩である彼は、性格が悪……否、いつも私をからかってくるから、反射的に身構えた。

（『トイレ占領すんなよ、うんこかよ』とか言われる……!?）

「大丈夫か？」

「へ？」

拍子抜けするほど優しい言葉だった。アルコールで緩んだ口から、間拔けな声が漏れる。

（心配してくれてる？ あの意地悪な高嶺さんが？ 真夏の倉庫作業でめちやくちや汗かいてたら『就業中にシャワー浴びるのやめてくれる？』とか言ってくる高嶺さんが？）

「吐いた？」

「え、いや、まだです」

「吐く予定あんのかよ。二次会やめとけ」

「もちろんです。水上さんはまだまだ飲めそうですけど……本当に強いですよ……」

「アイツには茜さんが張り付くだろ。送るとか言われても断れよ、俺が送るから」

「……」

「どうした？」

「いや……優しいからなんか気持ち悪いなって……」

「吐くなら指突っ込むぞ」

「ごめんなさい」

いつもの高嶺さんだった。

今日の幹事をしてくれてる茜さんは、快活なベテラン社員さんだ。

「私の酒を飲め！」のタイプだから、彼女に水上さんを任せられるなら安心である。

「じゃあ……よろしくお願いします」

小さく頭を下げると、高嶺さんは「おう」と短く答え、トイレには寄

らずに戻って行った。

（わざわざ来てくれたのか……）

偶然トイレに来たわけじゃなく、飲み会中の私の様子を見て追いかけてきてくれたらしい。

（さすが、抜け目がない）

高嶺さんは、仕事もできるし顔もいい。ただ、口が悪くて、近寄りがない雰囲気があつて、性格が悪いのが玉に瑕である。

いつもああなら、いいのになあ。



居酒屋の外に出てすぐ、二次会組とカラオケ組とその他組に分かれた。案の定水上さんは「しんどそうだし送るよ」と言ってきたけれど、私が何かを言う前にすぐ高嶺さんがやってきてくれる。

「俺が送る。昨日の件の説教があるからな」

「い、いたっ！ いちいち叩かないでください！」

（確かに昨日のミスは迷惑かけたけど！）

昨日、タイムリーにもそこそこデカイミスをやらしかけた私である。高嶺さんが気づいてくれなければ、私は今日この場に参加することすらできなかっただろう。そうは思うけども、叩かなくてもいいだろうとも思っ

た。
水上さんは、同期である高嶺さんに「あ、そーなの？」と朗らかに言う。

「あんまり瀬川さん虐めちゃダメだよ、高嶺」

「あ？ 虐めてねえよ」

「えっ、虐められてますよ」

「お前は黙ってろ」

「痛いっ」

私と高嶺さんのやり取りに、水上さんは笑う。ナチュラルボーン女たらしな彼は「じゃ、瀬川ちゃん。可愛いんだから夜道には気をつけてね」と優しい顔で私たちに手を振り、新入社員ちゃんがいる二次会組へと溶け込んで行ったのだった。

「……悪い人じゃないんですけどね」

「だから余計タチ悪いんだろ」

そう、結局みんな水上さんだってほっとけないのだ。この会社のいいところだと思う。

「行くぞ」

「あ、はい」

促され、駅へ向かう道を高嶺さんと歩く。

（足速い……）

背が高くて足が長いから当たり前かもしれないけれど、酔いが回っている身体には堪えるものだった。

（いつもなら、全然食らいつくの……）

次第に胃がぐるぐると回り始める。足を進めるたびに揺れが大きくなつて、食べたものとアルコールが融合しているのが分かった。

（あ、やばい）

「瀬川？」

急に歩みを止めた私に、高嶺さんも立ち止まる。

「す、みませ……吐きそ……」

「マジかよ」

高嶺さんが周囲を見渡す気配を感じ取る。せめてベンチがあればありがたいけど、こんな繁華街にはきつとないだろう。

「歩けるか？」

「ちよつとむりです……」

胃が揺れるのを治めたくてしゃがむと、高嶺さんは私の腕をくいと引いた。

「もうちょい気張れ。入るぞ」

どこに、と思つて視線を上げる。

ラグジュアリーな電飾が、ご親切に『休憩五六〇〇円』とピカピカ光つてくれていた。

いつもの私なら「え、最低！ セクハラです！ 会社に報告します！」と文句を垂れていただろうけど、現在の私は違った。

（オアシス……！）

ソファ、水、お風呂、トイレ！

そんな、家にだって当然にあるものたちへ思いを馳せ、高嶺さんに支えられながらラブホテルに足を踏み入れたのだった。



「いやー、お世話になりました！」

トイレで盛大に胃の中のをぶちまけて、汚れた髪の毛を洗うためにお風呂にも入った。

少し迷ったけれどバスローブを羽織り、ソファでニュースを眺める高嶺さんに明るく声を掛ける。

(めちやくちやスツキリした！)

「大復活かよ」

「まだ飲めます！　むしろ飲みたい！」

「馬鹿なの？」

嫌味だつて何のそのだ。気持ち悪さを吐いて捨て、アルコールで得た高揚感だけが残っていた。

「このラブホ、いいですね。お風呂もトイレもすごい綺麗でした」

「一緒に来る相手いねえくせに」

「『今はいない』だけです。つまり、伸びしろですね」

「酔ってんな。水上もこんな色気ゼロな女のどこがいいんだか」

「色気は隠してるだけですから！　着痩せするタイプなので！」

「へえ？　じゃあ見せてみるよ」

「うえっ？」

そう唐突に言われて、目が丸くなる。

高嶺さんはソファにふんぞり返ったまた言った。

「水上から助けてやっただろ。昨日の件も」

「そ、それはそうですけど」

「さっきお前が吐いたとき、俺の服ちよつと汚れたんですけど?」

「……!」

（確かに、吐いてるときに髪の毛まとめてくれたの高嶺さんだ……!）

私の髪の毛をうなじから掴んだ彼が「おわ」と小さく呟いていたのは、髪の毛についた吐瀉物で上着を汚してしまったからかもしれない。

（だから上着脱いでるのか……!）

「……っへ、変なことしないでくださいよ?」

「誰がするか」

（これ以上借りを増やすわけにはいかない!）

そんな思いで、ソファに座る高嶺さんの前に対峙した。

安っぽいバスローブの襟を掴んで、ゆっくり開く。肌着として着ていたキャミソールは吐いたときに汚れたから、身につけてるのはブラジャーだけだった。

（うう、恥ずかしい……！）

「ブラで見えん」

「えっ」

「早く」

（え、ブラジャーなしで見せるってことだったの!?!）

社会人の原則である報道相を怠りすぎていた。ブラジャー越しでも

「着痩せする」というのが分かってもらええると思っていたのに、そう解釈していたのは私だけだったようだ。

「……っ」

仕方なく、ブラジャーのカップに手をかけた。見せつけるつもりはないのに見せつけるような仕草になってしまい、羞恥心が積み重なる。

高嶺さんはニヤニヤと笑っていた。

「確かに。なかなか」

言いながら手を伸ばしてくるから、咄嗟に身を引いて「手！」と叫ぶ。それでも彼は怒られたつもりもない表情だった。

「触ってませんけど」

高嶺さんの指が、私の乳首を指さす。

「なの、しっかり勃ってんな？」

「！」

妙な状況に心臓がうるさくて、そんなことまで頭が回らなかった。言われて見下ろせば、高嶺さんに指さされた乳首はピン♡と興奮したように勃っていた。

（最悪だ……！）

「さ、寒いからです！　もういいでしょ！」

「ふーん」

ぴんっ♡

つまらなそうな声と共に、勃起した乳首を弾かれる。

「ひあ……ッ♡♡」

「……ふーん？」

「っっッ！」

急に弾かれた乳首にしっかりとした嬌声が出てしまい、高嶺さんはまたニヤリと口角を上げた。

（た、高嶺さんに乳首弾かれて変な声出しちゃった……！　乳首弱いのはバレちゃう……！）

高嶺さんにかからかわれ続ける日々だから分かるのだ。この人は、私の

弱みを知ったら一生付け込んでくるだろう。

「高嶺さん！」

「手が滑った」

「そんなわけないでしょ！」

「俺も風呂入ってくるわ」

「……！」

私の怒りを交わすように、高嶺さんはバスルームへと歩いて行った。

その背中を見ながら、ふと思う。

（に、逃げるなら今か……!!?）

逡巡する私の脳内で、イマジナリー高嶺さんがふんぞり返って言う。
くる。

「勘違いすんな。痛すぎるぞ」

（う、うるさい！）

結局ラブホテルから逃げられなかった私は、頭に入りもしないニュースを眺めることしかできなかった。



バスルームから出てきた高嶺さんは、すぐに「じゃ、寝るか」と言っ
た。

「え、一緒に？」

「終電逃したし、ネカフェ行くのも金の無駄だろ」

「……変なことしないでくださいよ？」

「誰がするか」

「さつきしてきたじゃないですか」

「あんなんで感じてんの？　だとしたら雑魚すぎるだろ、エロ漫画みたいにキスでイけるタイプか？」

「さつきと寝てください！」

「言われなくても寝るわ」

二人でベッドの端っこに行き、掛け布団を引っ張り合いながら目を瞑った。

（ほんとに最悪だ、早く家に帰りたい！）

最初はそうやってプリプリ怒っていたけれど、ちゃんと残っているアルコールはすぐに私を深い眠りへと誘った。

背中に、高嶺さんの体温がじんわりと伝わってくる。

（あったかい……誰かと寝るの、久しぶりだ……）

皮肉にも、寝る直前に浸っていたのは安心感だった。



（え？ あれ……っ？ なんか、もぞもぞって……）

一人暮らしには有り得ない感覚に目を開ける。

そして、私の乳首をつまむ指に瞬時に脳が飛び起きた。

「えっ？ あッ♡」

「さすがに起きるか」

こりっ♡ こりっ♡

私に覆い被さる高嶺さんの右手の指が、私の乳首をこねていた。

自分より大きな指で触られる感覚は久しぶりだった。寝起きの混乱と

甘い快感で、頭が正常に働いてくれない。

「えあッ♡ な、んッ、えっ？♡」

「寝てる時もピクピクしてエロかったけど、起きてもエロいな」

「高嶺さ……っ♡ んっ♡」

「乳首、弱いんだろ？」

「っ♡」

こり♡こり♡と可愛がられながら言い当てられてしまい、顔が熱くなる。少しずつ覚醒した脳が、やっと言葉を出してくれた。

「へ、変なことっ♡ んあっ♡ しないで、って……ッ♡」

「別に変なことじゃねーだろ。隣にエロいおっぱいがあって触らねえ男がいるか？」

ちろちろっ♡ くりくりくりっ♡

私に言い返した高嶺さんは、片方の乳首を舌で遊ばせた。もう片方は

相変わらず指でくにくに♡と遊ばれ、自慰では得られない気持ちよさで甘ったるい声が出る。

「あんツ♡ そ、それが変なことツ♡ なのおっ♡」

「お前、元彼に乳首開発されてんの？ すげえイイ反応するじゃん」

「ち、ちがっ♡ あっ♡ ちろちろ♡だめっ♡」

「じゃあ元から？ エッロ。こっちは？」

乳首を遊んでいた指が、バスローブの裾から入ってくる。

既に湿りきったクロツチに触れた高嶺さんは、そこを更に湿らせるように中指を上下に動かした。

「ハッ、もう濡れてんじゃん。エロすぎ」

「やあ……っ♡」

れろれろっ♡ぢゅっ♡ぢゅっ♡と舌で乳首を責めながら、高嶺さんの指は私のおまんこをくちっ♡くちっ♡といやらしい動きで擦った。

どんどん息が熱くなるけれど、彼の肩を掴みながらなんとか抵抗する。

「だ、だめ……ッ♡ 高嶺さんっ、あッ……♡」

「どうせご無沙汰だろ？」

「うあっ♡ こ、こんなの水上さんと一緒……っ♡」

「一緒にすんなや」

ぐちぐちぐちぐちっ♡♡

怒ったような声色で、高嶺さんはクロツチの上から私のおまんこを責め立てた。

太い指がクロツチを破る勢いでおまんこの入り口を襲うから、一層高い声が出てしまう。

「ひああッ♡ 強いっ♡」

「アイツより俺の方がまだお前を可愛がってるだろ」

「ど、どこがあ……っ♡」

今も、会社でも「どこが」だ。でも高嶺さんは酷く遺憾のようで、今度は私の乳首をぎゅむっ♡と強く摘まむ。くりくり♡と可愛がられてばかりだった乳首は、それだけで私の子宮をキュン♡とさせた。

「うあッ♡ だ、だめえっ♡」

「お前こそどこがダメなんだよ。乳首弄られてトロ顔しやがって」

「や、やだあつ、見ないでっ♡ あんッ♡」

ぐちぐち♡ぐりぐり♡とおまんこと乳首を虐められ、先輩の前だというのに媚びた女らしい喘ぎが抑えきれなかった。けれど、当の先輩だっ
てもう『男』でしかない。

私のイイところを責めながら、スラックスの下にあるおちんぽをしつかりと勃起させているのだから。

「お酒のっ♡ せいです、んッ♡ ひ、久しぶりだし……っ♡ ああッ♡」

「なら酒のせいにしたままでいいだろ。俺も酔った」

「ゆ、言うほど酔って、なさそうだった……っ♡」

「酔ってんだよ」

「んむっ♡」

私の返しをうるさがるように、高嶺さんが私にキスをする。たまに吸っている煙草の名残なのか舌が少し苦い。全く知らない男性とキスをしているような感覚に、何故か子宮がキュン♡とまた鳴いてしまう。

「いいな？」

高嶺さんは、そう同意を促すように聞いてきた。でも、聞いてきたくせに手はねっとりとした私のお腹を撫でて、ショーツに指を引っ掛けてくる。大きな親指に促され、湿ったショーツは強引に降ろされていった。

「んん……ッ♡　だめ……っ、高嶺さんッ……♡」

「今やめられる男がいたらさすがに師として仰ぐわ」

「う、やあっ♡」

っぷっ♡♡

太い中指が、膣内へと侵入してくる。文句を言う暇もなく苦い舌が絡んできて、熱い吐息混じりのそれが、私の文句を全て嬌声に変えていった。

（高嶺さんにキスされて、おまんこに指入れられちゃってる……っ♡）
週五日、一緒に働いている先輩と『こんなこと』をするなんてと終始脳が混乱していた。

いつも憎まれ口を叩き合っている相手に、女として抱かれるなんて。

「ナカ、うねってんな」

「やだぁ……っ♡」

「乳首の方がいい？」

「ひいあッ♡♡」

ちろちろちろちろっ♡♡

おまんこに入れた指で奥の方をくちゅくちゅ♡と撫でられながら、舌先で乳首を舐められた。身体を反らせて喘げば、舐めながらも高嶺さんの目がジッと思つめてくる。

（な、なんでそんなにじっくり見てくるのお……ッ♡♡）

恥ずかしくて、慌てて彼の目を覆う。

「み、ないでくださ……っ♡ はッ、んんっ♡」

「そう言われるとなあ」

のんびりと言う高嶺さんに抵抗虚しく両手をがっつと掴まれて、またジッと見つめられた。

（観察するみたいに見られてる……っ♡ おまんこ乳首虐められてエッチな顔してるの、全部目に焼き付けるみたい……ッ♡♡）

「うう……ッ♡ あッ、んんッ……♡」

「乳首気持ちいい？」

「や、やだあつ……♡」

「さすがに嘘だろ。腰跳ね上がらせてんじゃん」

「んああ♡」

ちゅばッ♡　ちゅばッ♡　ちゅばッ♡　ちゅばッ♡　ちゅばッ♡

高嶺さんの口が、私の乳首を何度も吸い上げる。オモチャでも得られない快感に、高い声が抑えられなかった。

（エッチな音で乳首吸われちゃってるよお♡　いつも意地悪な先輩に乳首悦ばせられちゃってるの、恥ずかしいのに気持ちいい♡　こんなのダメなのに♡♡）

「気の強いお前が」

私の乳首をぺろ♡と一舐めした高嶺さんの顔が近付く。

至極満足そうな、悪い顔だった。

「こーんな雑魚乳首だったとは」

くりくりくりくりッ♡♡

乳首をつままれて、親指と人差し指で弄られる。

その間もおまんこの奥はこちゅこちゅ♡と指で可愛がられているから、腰がびくびくッ♡と快感に跳ね上がった。

「ああんっ♡ だめッ♡ くりくり♡しながら奥シないでえッ♡」

「水上にバレなくて良かったな、一生肉便器にされるところだぞ。アイツはナチュラルに女を性欲発散器と思ってるからな」

「やあッ♡ あっ、あッ♡ だめっ♡ 高嶺さんっ、イッチやうからッ♡」

「もうかよ、早えな」

「ああっ、やッ♡ 指速くしないでえっ♡」
こちゅこちゅこちゅこちゅッ♡♡♡

おまんこの奥をしつかりと擦る高嶺さんの指が、スピードを上げる。乳首をくりくり♡と弄りながら、高嶺さんはやっぱりジツと私を見ていた。

目が合うと、口角が意地悪く上がる。

「瀬川のアクメ顔、見せてよ」

見せたいわけがない。見せられるわけがない。

でも、高嶺さんの指が止まるわけもなかった。私を確実に絶頂させようとする指に、私の腰はどんどん浮き上がっていった。

「あ、だめ、だめ♡ たかみねさ、あ、やだ、いく♡ いく♡
イっちゃ……♡ ～♡ ツ♡♡」

ビクビク♡

頂点まで達した絶頂で大きく身体を震えさせると、高嶺さんはおまんこから指を引き抜いた。

そしてすぐにサイドテーブルの引き出しを開け、中にあるものを手に取る。

コンドームだ。

「高嶺さ……っ」

「ごめん、優しくはする」

コンドームを装着した高嶺さんが、逃げ腰になる私の足を掴んで引張った。男性の力で引き寄せられて、逃げられないことをようやく深く悟ってしまう。

高嶺さんは見たこともないほど怖い目で、息を熱くしながら私のおまんこを凝視していた。

（雄の顔してるッ……♡）

「一回出させて」

ぐぢゅんッ♡♡

膨れ上がったおちんぽを一気に奥まで挿入される。息が止まってしま
うほど異様な硬さは、高嶺さんの興奮を物語っていた。

「う、あッ……♡」

（硬いしおつきい……♡ こ、こんなの知らないッ……♡♡）

しばらくオモチャしか入れてこなかったおまんこは、本物のおちんぽ
の気持ちよさにピクっ♡ピクっ♡と浅ましく締まった。

おまんこが本物の硬さを思い出している最中、高嶺さんが呟く。

「あーっやっぱ無理」

性欲に支配されたような目が、私を見下ろした。

「優しくすんの無理だわ」

ごちゅッごちゅッごちゅッごちゅッごちゅッ♡♡

ベッドに手をついた高嶺さんは、何の遠慮もなしにおちんぽを私に叩
きつけた。奥まで容易に届く長さで硬さに、子宮の奥がきゅうきゅう♡

と鳴いている。

「ああッ♡ や、あッ♡ 奥、奥だめえッ♡」

「クソ、瀬川相手に」

悪態をつかれながらもキスをされ、おちんぼを打ち付けられ、文句を言おうにも喘ぎ声が邪魔をした。硬くて長いおちんぼは私の膣壁を抉るように擦って、ラブホのベッドがぎしぎしと揺れる。

（瀬川さんのおちんぼすごい♡ 奥までこんなにごちゅごちゅ♡ されちゃうの初めて♡ しゅごい♡♡ こんなのすぐイカされちゃうよおッ♡ 先輩おちんぼに犯されてるのにいッ♡♡）

「あー気持ちいい」

「んうッ♡ は、あっ、あッ♡ ま、待ってっ♡ 高嶺さっ♡♡」

「無理。エロすぎ。いつもの威勢どこやったんだよ」

ぐりいッ♡♡

高嶺さんはおっぱいを片手で鷺掴みにすると、煽るように乳首を捻った。無防備だった乳首に快感が走って、膣内が一気に狭まる。

「ああッ♡♡」

「ははっ、乳首捻られて締めんなよ。マジで雑魚乳首で興奮するわ」

「へ、へんたいっ♡ おッ♡ んんっ♡」

「日頃生意気なお前が雑魚乳首って方がよっぽど変態だろ」

「あんッ、だめえッ♡ ぐにぐに♡しないでえッ♡」

「エッロい顔してんなあ」

「んッ♡ ああッ♡」

「そろそろイきそう？」

ピストンを続ける高嶺さんに乳首を弄られ続け、膣内の震えが止まらなくなってきた。ずこずこ♡とおちんぽで擦られる膣壁の限界が近くなつて、子宮がきゅうううっ♡と小さくなつていく。

「俺もイきそう」

「あ、あッ♡ 速くしないでッ♡ うあッ♡♡」

「あーイく。瀬川、こっち向いて」

「やあッ♡ あっ、はッ♡」

高嶺さんに頬を掴まれ、無理やり顔を向けさせれた。

ぱちつと目が合うと、高嶺さんは「あー」と苦しそうな顔をする。

「出る」

パンパンパンパン♡♡

さらにスピードを上げたピストンに、絶頂がすぐそこまで近付いた。

「あゝゝゝッ♡♡ やだあッ、はげしッ♡ あ、あ、だめッ♡」

「出る」と言った瞬間に私の唇を奪った高嶺さんは、すぐに唇を離すと

「あー……」と低い声を私の耳元で響かせ続けた。

大きな身体に抑えつけられて、吐精のためのピストンをドチュドチュ

♡♡と叩きつけられる。

「あ、おあッ♡ イっちやう、イっちやう、高嶺さっ♡ おあッ♡ んッ、あ、あッ、あッ……♡♡♡♡♡♡♡♡」

ビクビクッ♡ びゅるるッ♡♡

ぐうっと反った私の腰と同時に、高嶺さんも果てたようだった。

「はあ……っ、は……ッ」と荒い息を零す高嶺さんは、ぬりゅんっ♡とおちんぼを逃がし、もたつとくたびれるコンドームを外した。

「あー……早漏」

イライラしたように呟き、コンドームを結んで投げ捨てる。

そして当たり前前のようにもう一枚のコンドームを手についたのだった。

「た、高嶺さん……っ、なんでまたっ……」

「こうなったら一発も二発も同じだろ」

「最低……！」

私の素直な感想に、高嶺さんは何故か嬉しそうだった。

コンドームをつけた彼は、ぎしつとベッドを揺らすと再度私に迫ってやってくる。獲物を追い詰める、狼みたいだと思った。

「最低でも変態でもどうでもいいよ、別に」

腕を引っ張られて、寝転がった彼の上に乗せられる。騎乗位の体勢になつてしまったけれど、お尻を抑えられているから逃げるのがかなわなかった。

高嶺さんはまだ硬いおちんぽを、私の濡れそぼったおまんこにずりずり♡と擦り付ける。

「んっ……♡」

「どうせなら瀬川も気持ちよくセックスすればいいじゃん」

「そ、んな……ッ♡」

「マジでもう同じじゃね？ 雑魚乳首もバレて、俺に一発犯されて、ま

だ俺は元気だしお前もぐつちよぐちよ♡で……悪いことなんかある？」

「ッ……♡」

咄嗟に言い返す言葉が浮かばなかった。考える間にもおちんぼがおまんこを掠めて、時折カリが入りそうになっている。その度に私の心臓は期待で跳ねて、けれどすぐ消えてしまう圧に情けなくも残念がっていた。
(ムカつくけど、高嶺さんの言うとおりだ……っ♡)

前の彼氏と別れて、もう随分経つ。セックスだって久しぶりだったし、こうも気持ちよくさせられているのだ。

水上さんに食い物にされるよりよっぽどマシだとも思う。水上さんは、高嶺さんが言うように自分本位なセックスしかしないともっぱらの噂だった。

「お前と俺の仲だろ？」

からかうように笑われて、明確にイラッとした。

だつてこの男は、いつでも私にばかり意地悪をしてくるのである。

新入社員ちゃんには気安くジュースを奢るのに、私に対しては「俺コーヒー」と私のお金が入った自販機に向かって勝手にボタンを押してくるような意地の悪さがあるのだ。

周りからは仲が良いなんて揶揄されるけど、私はいつだつて反論したかった。反論したら、また更に「喧嘩するほど」なんて言われて殊更イラッとするのだけど。

なのに、言うことに欠いて『お前と俺の仲』？ 本当に、この男は！
(ああ、もう、どうにでもなれ！)

気づけば、腰が揺れていた。今にも入りそうなおちんぽで、オナニーをするようにクリトリスを押し当てる。くちゅくちゅ♡と更に卑猥な音がした。

「あ……っ、瀬川……ッ」

私の腰の動きに驚いたのか高嶺さんは小さく呻いた。いつもニヤついている顔を崩せたことに、優越感がなかったなんて言えるはずもない。

だから、あえて言わせてもらおう。

「私たちッ、ん……っ♡ 仲良し、ですもんね……ッ？♡」

高嶺さんは、私の言葉に一瞬だけ驚いた表情を見せた。

けれど、その顔もすぐにニヤリと歪む。

「セックスするくらいにはな」

ずぷッ♡♡

おちんぼの角度を変えられ、あっという間に私のナカがいっぱいになった。下から挿入されると余計にその長さが分かって、悲鳴を出すみたい
に「ああッ♡」と声を放つ。

「高嶺、さんッ……♡」

「動いて」

「ん……っ♡」

熱い目で見つめられてしまったから、黙って従った。

腰を前後にグラインドさせると、高嶺さんがうっとりしたような表情で私たちの結合部をまじまじと見る。

「あーエロい。最高」

「んっ♡ う、るさい……っ♡」

「褒めてんのに」

「ひッ、ああッ♡」

こりこりこりッ♡♡

高嶺さんは私のアンダーのあたりを掴むと、親指で乳首を弄った。乳頭を押しながら左右に揺らされ、腰の動きが止まってしまう。

「瀬川」

「わ、分かって、ますッ♡」

早く動けと促され、乳首をこりこり♡とされながらも再度腰を動かした。ずちっ♡ずちっ♡と水音を鳴らしながら、反り立った高嶺さんのモノを膣壁で擦る。

長いおちんぽは一度出したというのにまだまだ硬く、油断をすればナカから飛び出ていきそうだった。

（騎乗位で乳首触られるの、気持ちイイ……っ♡ 高嶺さんの指、乳首虐めるの上手すぎてもっと弄ってほしくなっちゃう……っ♡）

「乳首弱すぎだろ。すぐトロ顔するじゃん」

「だ、ってえ……っ♡」

「おいで」

ぐいっと引つ張られて、高嶺さんに近付いた。すると彼は私の腰を抱きしめて、眼前に置かれた私の乳首をれろれろ♡と舐め始める。じつとりした唾液とざらざらした舌に、鳥肌と快感が走っていく。

「ひあんッ♡」

「ほら、動け」

止まった腰を窘められるけど、れろれろ♡こねこね♡と舌で乳首を虐められるとどうしてもぎこちない動きしかできなかった。

（舌ッ♡ 高嶺さんの舌、根元から乳首舐めてくりくり♡してきてイイよおっ……♡ 抱きしめられてねっとり乳首舐められて、おまんこきゅうきゅう♡しちゃってるッ……♡♡）

「せーがわ、腰」

「んッ♡ ごめんなさ……っ♡ でも、あッ♡ 高嶺さんがあッ♡」

「雑魚乳首め」

れろれろっ♡ こりこりっ♡

ぢゅぱっ♡ ぢゅぱッ♡ ぢゅぱッ♡ ぢゅぱッ♡

私をぎゅうっとなぎしめたままの高嶺さんは、乾きを潤すかのように

私の乳首をしつこく可愛がる。

「ひいあっ♡ あっ♡ だめッ♡ そんなに舐めないでえッ♡」

いつもクールな高嶺さんに、ハアハアと息を荒くされながら乳首を舐められている背徳感がすごかった。挿入されたおちんぽをきゅう♡と締め上げると、高嶺さんが舌で私の乳首を可愛がりながら「おい」と呟く。

「締めんな、って……ん……ッ」

「た、高嶺さんの♡ 舌♡♡ んあッ、気持ちいい♡♡ からあ……ッ♡」

「あー……」

とん♡♡ とん♡♡ とん♡♡ とん♡♡

私の乳首を舐めながら何故か唸った高嶺さんは、そのまま腰を動かした。最奥をこつこつ♡と叩かれて、おろそかになっていた腰がビクッ♡

と震える。

「やつ♡ だめッ♡ は、あッ、高嶺さんッ♡」

「エッロいんだよ、お前」

「んッ、ふあッ♡ ああッ♡ 奥当たてるよおっ♡」

こちゅっ♡ こちゅっ♡ こちゅっ♡ こちゅっ♡

れろれろろッ♡ ぢゅううッ♡ ぢゅぱッ♡ ぢゅぱッ♡♡

腰を抱きしめられているせいで、もうされるがままになるしかなかった。ぬろぬろ♡と蠢く舌で、勃起した乳首を転がすように舐められ、つまみ出されるように何度も吸われる。

高嶺さんのおちんぽは、情けない私の腰にピストンを教えるようにとんっ♡とんっ♡と膣奥をノックした。

「あッ、あんっ、やッ♡ 気持ちいい♡ 高嶺さんッ♡ あ、んッ♡ だめえっ♡♡」

「マージで、いつも生意気なくせに乳首激弱とかズルいだろ。俺を言い負かした夜も家じゃ一人で乳首弄ってんの？」

「やあッ♡　ち、違ううッ♡」

「じゃあクリオナ派？」

「そう、じゃないけどお……っ♡」

「ほら、やってんじやん。でも、さすがに自分じゃ舐めるのも吸うのもできないもんな？」

ぢゅううッ♡　ぢゅぱッ♡　ぢゅぱッ♡　ぢゅぱッ♡　ぢゅぱッ♡

リップ音よりも数倍いやらしさを込めたキスで、乳首を何度も吸われる。言われたとおり、オナニーじゃ味わえない快感だった。

「あッ♡　は、んッ♡　気持ちイイ……ッ♡」

「いつもそれくらい素直なら可愛いのかな。舐められるのと吸われるの、どっちが好き？」

「んっ、あっ♡ ど、どっちも好きい……っ♡」

「あーっ煽るのやめてくれる？」

「ひッ、ああんッ♡♡」

ごちゅっ♡ ごちゅっ♡ ごちゅっ♡ ごちゅっ♡

ちろちろちろちろッ♡♡

激しくなつたピストンで揺れる乳首を、高嶺さんの迎え舌がちろちろ♡と擦ってくる。最奥を突いてくるおちんぼの速さに、もう何も考えられなくなる。

「ああッ♡ だめえッ♡ 煽ってない、いつ♡♡」

「煽ってんだろ。いつものつんけんした態度どこ行つたんだよ」

「うっ♡ んあッ♡ い、意地悪……ッ♡」

「そりや意地悪にもなるだろ、乳首だけでこんだけエロくなんだから」
がりっ♡と高嶺さんの歯が私の乳首を甘噛みする。おちんぼの快感に

酔いしれていた子宮は一気に狭まり、腰がぐうつと反っていった。その反った腰を許さない高嶺さんが、ぎゅうつと私をまた抱きしめる。

「ひお……ッ♡ 乳首、噛んじやッ♡ だめッ なのおっ♡ あ、おッ♡」

「きゅうきゅう締めて言うことじゃねえな。おら、さっさとイけ雑魚乳首」

ごちゅッごちゅッごちゅッごちゅッごちゅッ♡♡

乳首を噛まれたまま、反り立ったおちんぽで膣奥を激しく貫かれる。元彼にも突かれたことがない場所をごんッ♡ごんッ♡と叩かれ、あまりの気持ちよさに目に涙がにじんだ。

「ああ……ッ♡♡ らめっ♡ 奥そんなにらめえっ♡ たかみねさ、ッ♡ おッ、イクッ♡ イグッ♡♡ イ……っ♡ ……ッ♡♡♡」

強制的にイカされた膣が絶頂に届くと、高嶺さんに抑えつけられた腰

が大きく揺れた。おまんこは何度もきゅうっ♡と締まって、高嶺さんのおちんぼの形を嫌でも教えてくる。まだ硬い。まだ、昂ぶっている。

「瀬川」

腰を抱えられたまま、高嶺さんが上体を起こす。挿入されたまま向かい合う形になって、思わず背中勝手に手を回すと自然な流れであるようにキスをされた。

「名前呼んで」

「うあッ♡ え、えっ？♡」

とちゅっ♡ とちゅっ♡ とちゅっ♡ とちゅっ♡

抱き合う姿勢で腰を動かされながらそう言われたから戸惑った。その言葉にも、思いのほか暖かい高嶺さんの体温にも混乱している。それでも、快感に浸された頭は勝手に動いた。

（高嶺さんの、名前って……っ♡）

「あ、きらっ？♡」

高嶺彰。

入社後、読み方が分からなくて本人に聞いたことがあった。高嶺さんが自分で「あきら」と発音したとき、何故か変にドキッとしたのだ。だから、忘れようがなかった。

「あー」と高嶺さんが低く唸る。

「ヤバいな、それ」

「んんうッ♡」

独り言のように言った高嶺さんは、また私にキスをした。恋人にするみたいに舌を絡められ、唾液を舐められ、ちゅつと唇にリップ音が落とされる。

「志帆」

「ッ……♡」

ぱちゅぱちゅ♡とおまんこを犯されながら名前を呼ばれると、快感が一層高まったのが分かった。

(た、高嶺さんにおちんぽ入れられながらキスされて名前呼ばれてる

……っ♡へ、変ッ……♡なんでこんなにドキドキするのッ……♡)

「な、なんで名前ッ♡ あっ♡」

「お前が呼んだから」

「ん、ッは♡ だってッ♡ 呼べって、言われたからあっ♡」

「動揺しすぎだろ。可愛い」

「なっ♡ あッ、やあッ♡」

「百面相」

ぱちゅッ♡ ぱちゅッ♡ ぱちゅッ♡ ぱちゅッ♡ ぱちゅッ♡

相も変わらず意地悪を言われているのに、奥を可愛がるおちんぽと優しいキスでろくな言葉が出なかった。

高嶺さんが、私の唇にちゅっ、ちゅっ、と何度も可愛いキスをする。

「志帆」

（頭変になる……ッ♡）

あの意地悪な高嶺さんが。私にだけジュースを奢ってくれない高嶺さんが。

「あー……イキそう」

眉間に皺を寄せ、高嶺さんは熱い吐息を漏らした。私の膺に叩きつけるおちんぼが、さらに自分勝手にピストンを速める。

「おッ♡ や、あっ、んうッ♡」

「名前呼んで。口開けて」

激しい動きで喘がせてくるくせに、よく分からない命令をされて苦しくなった。

名前。口。高嶺さん。

「彰、さんッ♡」

「あー……」

「ふあ……ッ♡ んっ、んッ♡」

ばちゅッばちゅッばちゅッばちゅッばちゅッ♡♡

キスをされて、唾液と酸素を奪われる。興奮しきったおちんぽを叩きつけられて、思考はもう途切れ途切れもいいところだった。

（たかみねさん、たかみねさん、たかみねさん）

「イク」

「あッ♡ あッ、しゅごいいッ♡ だめ、だめ、イクッ♡♡ イクッ♡

あ、あッ♡ あ~~~~ッ♡♡♡」

性欲任せの腰の動きでイカされてしまい、その収縮のせいか高嶺さんが小さく呻いた。

「……ッ」

眉間に皺を寄せた高嶺さんが、またキスをしてくる。ついでにと言わんばかりに乳首をカリカリ♡と弄られて、いったばかりの膣がまた痙攣する。

「あ……ッ♡」

「あーエロ」

吐き捨てられるように言われて、舌が侵入してくる。

高嶺さんの体温が気持ちいいから、絶頂の余韻を引きずりながらついそれに応えてしまった。抱きつくように身体を預けると、腰を抱きしめられる。まるで本当に恋人同士みたいだ。

くちゅくちゅ♡と唾液の絡む音と、私たちの小さな吐息が部屋に響いた。

（あー……何で私、高嶺さんとこんなことやってんだろ……）

もうほとんどアルコールのなくなった頭が、少しずつ現実を見つめ始

めていた。



翌日、目覚めると高嶺さんはいなかった。お金が置かれてあって、メモ帳に「払つ」とあったから甘んじて受け取る。

（さすが先輩。こういうの、なかったことにするタイプだろうな）

そして、どんな顔をすればいいのかとどきまぎして迎えた翌週、私の顔を見た高嶺さんは手のひらを差し出すと平然と「お釣り返して」と言ってきたのだった。

「え、ダツサ」

ついつい思ったことを言つてしまえば、すぐさま頭を叩かれた。痛かつたけど、ホツとした。



「おう」

「ゲッ」

「どつくぞ」

そんなことがあつた数日後、給湯室で高嶺さんと鉢合わせてしまった。素直な私は、素直な声を上げてしまう。

換気扇の下で煙草を吸っていた高嶺さんは、煙草の火を缶の灰皿に押

しつけて消火する。まだ少し長い煙草だった。

「煙草臭いです」

「だから消しただろ」

「喫煙者は分らないと思いますけど、残り香がもう臭いんですよ」

「今から昼飯？」

「話逸らさないでください」

うちの会社でも、喫煙者は年々減っていた。そのせいで相対的に「煙草やめろ」と言われる回数が増えている高嶺さんは、すぐに話題を変えてくる。

高嶺さんの目線の先にあるカップうどんを開けて、粉末スープを中心に入れた。

「倉庫の整理手伝ってて、気づいたらこんな時間だったんです」
「へー」

適当に返されてイラッとしつつも、ポットのお湯を注いでいく。

（セックスまでした仲だろ。……いや、別にいいけど）

あの日のことは、私たちの間で完全になかったことになっていた。高嶺さんは顔にも話題にも出さないし、態度だって何一つ変わらない。

「高嶺さんはサボりですか？」

「課長とのアイデア出しが煮詰まったから戦略的撤退だ」

「サボりじゃないですか」

「あの人、納得するまで時間かかんだよ」

「へー」

「あ？ 聞いたって適当な返事すんな。乳首虐められてえのか？」

「なっ……っ！ つ、あつつっ！」

「おい、バカ」

急に出てきた話題に動揺して、ポットのお湯が手に引っかかってしまっ

た。

その熱さにもっと動揺していたら、高嶺さんが蛇口を捻り、私の手を引っ張って冷水で冷やしてくれる。

「あ、ありがとうございます……」

「大して掛かってねえだろ」

「ですね……」

「……」

「……」

（何で、離れてくれないんだろう……）

嫌な予感しかしなかった。

私の手を掴む高嶺さんの手は、大きいし強い。背後に立たれると、シンクに追いやられているような気持ちになってしまった。

「あの、高嶺さん……」

「なに」

「えっと、離れてくれると……煙草臭いですし……」

「はい犯す」

「セ、セクハラ！」

「冗談だろ」

と言いつつも、高嶺さんの空いている手は私の腰に置かれていた。

私の手を握っていた手が蛇口を捻って水を止め、そのまま服の中へと入ってくる。

「高嶺さんっ！」

「犯さねえよ、弄るだけ」

「それもセクハラ……っ、ん……ッ♡」

すりすり♡と高嶺さんの指がブラジャー越しに私の乳首を擦った。いつの間にかしっかりと腰を抱かれて、高嶺さんにぴったりと密着してしまっ

ている。

（後ろから中指で優しくすりすり♡されるの気持ちいいッ……♡ この前のこと思い出しちゃう……っ♡）

「もお……っ、だめッ……♡」

「ほーんと雑魚乳首だな。これだけで甘い声出しちゃって」

「やだぁ……ッ♡」

「嘘つけ。ほーら、乳首出てきたぞ？ お前よりよっぽど素直じゃねえ

か、見習わねえとな」

男性の指で擦られた乳首は、すでに主張をし始めていた。すりすり♡としていただけの中指が、今度はその硬さを遊ぶようにこりこり♡と爪を立てて弄ってくる。

「んあ……ッ♡」

「かーわい」

「あッ、や……ッ♡」

「反対側も触ってやろうな」

私の腰を抱いていた腕がほどかれ、するりと服の中に入ってくる。

（あ……ッ♡ 乳首を探すみたいにな差し指がつつ……っ♡って這ってくる♡ もうちよつとで届いちゃうっ♡ あ、ああ……ッ♡ 届いちゃうっ♡

たあ♡ 「見つけた」って言うみたいにくるくる♡されちゃってる♡♡♡
ブラジャーの上からなのに気持ちイイよおッ♡♡♡）

「んんッ♡」

「乳首すりすり♡されるの気持ちいいな？ 志帆チャン」

「やあ……っ♡ 高嶺さ、っ♡ 誰か、来たら……ッ♡」

「休憩室のドアの音ですぐ分かるだろ。そしたら解放してやるよ」

「なんでえ……ッ♡」

「お前につんけんされると、あの夜を思い出すんだよなあ」

「んあッ♡」

こしこしこしこし♡♡

今度は大きな指の腹が、硬くなった乳首を強めに擦った。同時に「あの夜」を思い出してしまい、クロッチがじわあ♡と濡れる感覚に襲われる。

「雑魚乳首の可愛い瀬川に会いてえなあって」

「あッ♡ んん……ッ♡」

「乳首ちよつと弄られただけでトロトロしちゃうもんなあ、瀬川は」

「はあ……っ♡ んッ♡ やだあ……っ♡」

「ブラジャー越しはしんどいよな？ ごめんごめん」

「ちがっ、あッ♡」

変な解釈を持ち出した高嶺さんは、ブラジャーのカップをずらすと剥き出しになったおっぱいの乳輪を人差し指でくるくる♡くるくる♡とな

ぞった。

（や、やだこれえ……っ♡ 乳輪だけなものもどかしい……っ♡ しかも
たまに乳首に当たってくるから、身体が勝手に期待しちゃうっ……♡）

「可愛い雑魚乳首、見ーせて」

片方をくるくる♡しながら、高嶺さんの手は器用に私の服をまくり上げた。鎖骨のあたりまで上げられて、カップから溢れさせられたおっぱいが露わになってしまう。

「ははっ、ビンビン♡じゃん」

「やっ……、み、見ないでえ……っ♡」

「瀬川はイヤイヤ言ってるのに、乳首は触ってほしいうて言ってるみたいだな？ 充血しちゃってさあ」

「はっ♡ あっ……♡」

「それともくるくる♡の方が気持ちいい？」

「ふ……ッ♡」

くるくる♡　くるくる♡

耳元で、高嶺さんの低い声が響いてくる。その声に耳を震わされながらくるくる♡と焦らされると、私の息はどんどん荒くなっていた。

（指……っ♡　高嶺さんの固い指で、乳首触ってほしい……ッ♡　このまま真ん中の方に行ってくりくり♡してほしいのに、くるくる♡くるくる♡ってずっとエッチな触り方されて……乳首しんどいよおッ……♡）

「苦しそうだな、雑魚乳首。触ってやろうか？」

「……ッ♡」

「こりこり♡って、されたいだろ？」

くるくる♡をやめた高嶺さんの指が、乳頭の真上でぴたりと止まった。その指は降りてくると思いきや、本当に止まってしまったから心臓がどくどくと脈打ってしまう。それくらい、期待してしまっていた。

（さ、触ってくれないの……ッ？♡）

「こういう動き、好きだろ？」

決して私の乳首を触らない中指は、乳頭の真上でいやらしく揺れた。このまま乳首に触れてくれたら、きつと私はビクビク♡と腰を揺らしてしまっだろう。そんな、エッチな指遣いだった。

両方の指がそうやって乳首を焦らしてくるから、私の息がさらに荒くなる。

「は……っ♡ はあッ……♡」

（あと、一センチなの……ッ♡）

無意識に胸を反らせてしまうと、高嶺さんは喉を鳴らして笑った。

「何自分からいこうとしてんだよ」

「……ッ♡」

「淫乱乳首にも程があるだろ」

「た、高嶺さん……っ♡」

「媚びた声出しやがって」

高嶺さんの顔が近付いてくる。キスをされそうだったから受け入れて、媚びるように舌を絡めた。

「興奮するだろうが」

ぎゅむうッ♡♡

親指と中指で、乳首の形が変わるほど押し潰される。急な刺激に私の子宮はひどく驚き、奥の方がっうん♡と快感で震えた。

「ああッ♡」

「悦びすぎだろ。ド淫乱」

「だってえ……ッ♡♡」

「かわいい」

こりこりこりこり♡

低く呟いた高嶺さんの言葉に反応する暇もなく、潰された乳首を人差し指で虐められる。やっと直に触ってもらった悦びで、ショーツはもうすっかり濡れてしまっていた。

(こりこり♡やっとしてくれたッ♡ 気持ちいいよおっ♡ 高嶺さんの指好き♡♡)

「乳首気持ちいい? 瀬川」

「き、もちいいです……ッ♡ うあッ♡」

「乳首好き? ムラムラする?」

「すきッ……♡ 乳首、触られちゃうとっ♡ エッチになっちゃう

……ッ♡」

「あーたまんねー」

「んあッ♡」

ぎゅうッ♡♡

一層乳首を潰されて、高嶺さんのおちんぽを背中に押しつけられた。

熱を持って硬くなったそれに、私の子宮まで熱くなる。

「給湯室じゃさすがにやれねえな、クソ」

「はッ……♡ んうっ♡」

「あーうぜー」

カリカリカリカリッ♡♡

苛立ったように呟く高嶺さんは、苛立ったように私の乳首を爪で引つ搔いた。勃起しきった乳首を弾かれ、頭の中で何かがパチパチと破裂していつてしまう。

「んあッ♡ カリカリ♡しゅきいッ♡♡」

「雑魚乳首、エロい声出すな。俺の理性が飛んだらどうすんだよ」

「だ、だってエッ♡ あッ♡ んっ♡ イイっ♡ 乳首気持ちいいのおッ♡」

「給湯室でブチ犯されてえのか？ 見つかったらクビだぞ」

「やっ♡ はっ、んっ♡」

「声出すなっつつてんだろ。乳首イキさせるぞ」

「おっ♡♡ ひっ♡」

「いま悦んだな？ 淫乱」

カリカリカリカリカリカリ♡♡♡

乳頭から根元まで、私の乳首に最大限の快感を与えようとする高嶺さんが爪を立てた。乱暴な指がビンビン♡になった乳首を引っ搔くたびに、ぞわぞわするような快感が私の膣を震えさせる。

「あっ♡ おっ♡ それだめっ♡ あ、んっ♡ 高嶺さっ♡♡」

「お望み通り乳首イキさせてやるよ。そしたら、給湯室に来るたび俺の指思い出しちゃうな？」

「やあっ♡ そんなっ♡ だめえっ♡ あっ、ああっ♡」

「乳首擦られて、媚びて、カリカリ♡されて乳首イキされたこと、毎回
思い出して下着濡らせよ？ ド淫乱」

「ぶっ♡ やっ、んっ♡ いじ、わるう……っ♡♡」

「今更すぎだろ」

「んあッ♡ あッ♡ あッ♡ だめッ♡ クるっ♡ キちやうつ、高嶺
さんッ♡」

「おら、媚びろよ雑魚乳首。このままイかせてやるよ」

「ぶっ♡ はッ♡ イくっ♡ 乳首イキしちやうッ♡ しちやうのッ♡
雑魚乳首もつとシてっ♡ いっぱい虐めてッ♡ 高嶺さんの指で、
雑魚乳首イかせてください♡♡」

「あー……生殺し」

カリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡♡

「あゝッ♡♡ イくっ♡♡ イくイくイくイくッ♡♡ アクメすりゅッ♡

♡ あ、あッ♡♡ あッ♡ あッ♡ 〃〃ッッッ♡♡♡」

ビクビクビクッ♡♡♡

（イ、イっちゃったあッ♡ 給湯室で先輩に乳首虐められて、乳首でア
クメしちやったあ……っ♡♡）

加減されることなく乳首を引つ搔かれて、腰を大きく揺らす。激しく
いったせいで膝をガクガクさせていると、後ろから抱きすくめられたか
ら驚いた。

「え、なん……っ!?」

「鎮めるからなんか萎えること言って」

密着した下半身に、硬いものがまだあった。私の腰あたりに押しつけ
られたおちんぽに、この前の夜を思い出して子宮の奥が甘く疼いてしま
う。

（……って、あれ？ そういえば……）

が、甘く疼いた子宮は、目に入ったカップうどんですぐさま上書きされた。

「あ！」

「うっせ。なんだよ」

「カップうどん！ 高嶺さんのせいで！ お腹空いてるのに！」

「おお、いいぞ瀬川。すげえ萎える」

「うざい！ お金払ってください！」

「それはたかりだろ」

「絶対高嶺さんのせい！」

抱きしめられたまままぎやあぎやあ言っていたら、休憩室のドアがガチャリと開く音がした。瞬時に離れた私たちは、乱れた衣服を整えながら給湯室まで歩いてくる人物の足音に耳を澄ませる。

「あ、いたいた」

ひよつこりと顔を出したのは、水上さんだった。

「わ。お疲れ様です、水上さん」

「課長、探してたか？」

あたかも「いつも通り」の顔をした私たちが言うのと、水上さんは優しい顔でニコツと笑った。

「高嶺じゃないよ、俺が瀬川ちゃん探してたの。っていうかまた喧嘩？ 羨ましいくらい仲いいねえ」

「仲良くないです！」

「だそうだ」

「はは。じゃあ、俺とデートしようよ」

「えっ？」

「どういう理屈だよ」

高嶺さんのツツコミ通りだ。ぽかんと口を開けてしまう。

「高嶺の愚痴会だよ。瀬川ちゃん、カニ好きだったよね？ 安く出してくれる知り合いの店があるんだ。この間の飲み会が楽しかったから、また一緒に飲みたいなって」

「カニ……！」

昨年末の忘年会で口にしたカニたちを思い出して、目が爛々と輝いてしまった。だって、一人暮らしではまず口にできないじゃないか。しかも、安く！

喜ぶ私をチラリと見た高嶺さんは、水上さんに視線を移すと呆れたように言う。

「お前、会社で堂々とナンパすんなよ」

「お、嫉妬かな？ 高嶺くん」

「だあれが」

「だったらいいでしょ？ 俺、このあとちよつと出るからまた連絡する

ね。じゃあ、お疲れ」

ひらひらと手を振りながら、水上さんが去って行く。

休憩室のドアが閉まった音を確認すると、高嶺さんは呟くように言った。

「……既読無視しろよ」

「何で高嶺さんが口出すんですか」

「お前な」

「付き合ってもないのに」

「セックスした上、給湯室で乳繰り合う仲だろうが」

「ほんと最低！ それ片付けといてください！」

「ああ!？」

デリカシーの欠片もない発言に苛立って、そう命令してすぐ給湯室から出てやった。

（付き合ってもないのに、本当に勝手すぎる！　だったら告白してくれ
ばいいのに！　そうしたら私は！）

「……ん？」

廊下を歩きながら、自分の思考をリプレイさせる。

（……そうしたら、私は？）

私は、一体、何を。